近つ飛鳥の『夏の夜の夢』

宮　村　一　幸

――うるわし　あきつしまやまとのくに　たたなづくあおがきやま――古代。夏の真昼。降りそそぐ太陽の光。乾いた大地。空高く蜻蛉が飛び交い、涌き上るような蝉の声。

《国引と名乗》

第 6 回をむかえる学外公演、シェイクスピア原作『夏の夜の夢』の演出は、私にとって 4 回目になる。以前から、日本を舞台にしたいという学生諸君の声もあり、今回は我が日本国に移し換えて翻案を試みた。舞台を原作のギリシャ・アテネから日本に引き寄せ、引き寄せついでに地元も地元、大阪芸大の足元である近つ飛鳥の地へ来てもらうことにした。“近つ飛鳥”というのは『古事記』に“遠つ飛鳥”と共に出てくる地名で、履中天皇（336～405）の都・難波宮から見て、遠い飛鳥は奈良県明日香村とその周辺を指し、近い飛鳥はここ河内の飛鳥を指すという。この地は古墳や古代遺跡の宝庫である。古くから多くの人々の心を魅了してきた、由緒ある歴史の古里、水良し、風良し、緑良しのこの地を舞台にしよう。時代もはるか昔に夢を馳せて、埴輪に登場してもらう。『古事記』や『万葉集』に改めて目を向けてみると『夏の夜の夢』の登場人物たちが結構すんなりと重なってくれる。今回のモットーは“素朴で・長閑で・おおらかで・楽しい舞台”

まず登場人物の名前を大和風に置き換えることにする。原作者もネーミングの工夫を大いに楽しんだはずだ（紀要第16号に報告）。アセンズ（アテネ）の大公シーシアスは、大阪に因んで難波矢命。その妃になる女人族アマゾンの女王ヒポリタは鹿毛馬媛、彼女は大阪から離れた地方豪族の娘で、馬に乗って野山を駆けまわる女丈夫とする。大公につながる宮廷人としては、ハーミアの父イジアスが陽炎連、シーシアスの式部長官フィロストレイトは宴係。4 人の若者たちの男子には美称である彦をつけ、女子には姫をつける。ライサンダーは雷彦、デメトリアスは日向彦、ハーミアは美加瑠姫、ヘレナは阿比良姫。人間界の職人たちは、大工のピーター・クィンスが棟梁、機屋のニック・ボトムは鍛冶屋の赤鼻、オルガン修繕屋のフランシス・フルートは女性が演じるので機織の眉根、仕立屋ロビン・スターブリングは仕立屋早竹、鋳掛屋のトム・スナウトは壺造りの手白、指物師スナッグは指物師脛黒と名づける。この他に水草を演じる職人たちが出る。

妖精たちは、森の精霊に因んで力ある植物の名と神様の名を借りた。日本の神々の根源に造化三神がある。天の中心点・天御中主と、生成力（産す霊）の男神・高皇産霊と、女神・神皇産霊である。この、生命を産む源として“産霊”をお借りして、森の妖精王オーベロンは岳黒松産霊と名乗る。妖精の女王タイターニアは梓朧富士菊。梓という木の名は今では使われていない。カバノキ科の夜糞峰榛ではないかと言われている。木質が強靭で弾力があり、上代には弓の材とされた。梓弓は祭礼にも用いられ、神降や魔除の力を持つと言われている。これは後述する鳴弦にもつながる。ククは菊の古い呼び方で、禊にかかわる水の女・菊理媛に由来する。王と女王には由緒ありげな意味づけをしてみたが、他の妖精たちはもっと素直に名づけよう。人気者の茶目な妖精パック、今回は 3 人で 1 役となり猿捕茨 三葉緑子という長い名前。猿捕茨はゆり科の落葉灌木で、茎は細く、他物にもたれて伸び、縦横

に絡み合った枝に、線香花火がはじけたような形に小さな赤い実をつける。女王を取り巻く妖精たち、豆の花・蜘蛛の巣・蛾・辛しの種は、紅(クレナイ)・紫(ムラサキ)・椿(ツバキ)・土筆(ツクシ)・梔(クチナシ)・百合(ユリ)・蔦(ツタ)・芒(ススキ)・鬼灯(ホホヅキ)・蓬(ヨモギ)と名乗る10人の花たちになる。王と女王が取り合って喧嘩の原因になるインドの子供は、海の向うから難破船で流れついた青い目の子供とした。

人物	(略称)	原作の人物
難波矢命ナニハヤのミコト	(ミコト)	シーシアス
鹿毛馬媛カケウマのヒメ	(ヒメ)	ヒポリタ
陽炎連カギロヒのムラジ	(ムラジ)	イジアス
宴係ウタゲのカカリ	(ウタゲ)	フィロストレイト
日向彦ヒムカヒコ	(ヒムカ)	デメトリアス
雷彦イカズチヒコ	(イカズチ)	ライサンダー
阿比良姫アヒラヒメ	(アヒラ)	ヘレナ
美加瑠姫ミカルヒメ	(ミカル)	ハーミア
岳黒松産霊タカミクロマツのムスヒ	(ムスヒ)	オーベロン
梓朧富士菊アズサオボロフジのクク	(クク)	タイターニア
猿捕茨三葉緑子サルトリイバラのミツバミドリゴ	(サルトリ)	パック
青い目の子供	(青い目)	インドの子供
畑泥鰌ハタケドジョウ	(ハタケ)	キャリバン [新入り]
棟梁トウリョウ		ピーター・クィンス
赤鼻アカバナ		ニック・ボトム
眉根マヨネ		フランシス・フルート
早竹サチク		ロビン・スターブリング
手白テジロ		トム・スナウト
脛黒スネグロ		スナッグ

《助っ人・キャリバン》

多人数の学生諸君に、平等に勉強の機会を持ってもらう学校というシステムの中で、いつも心を痛めるのは配役である。ドラマには主があり脇があって成り立っている、平等はありえない。それでも、やり甲斐を感じる役・人物を少しでも増やしたいと常々物色していた。翻案以前から目をつけていたのは、同じ作者の『テンペスト』に登場するキャリバンという人物である。この戯曲は喜劇ではないが、妖精や怪物が人間と絡み合って幻想的な雰囲気をつくり出している。領地を奪われ、娘ミランダと共に絶海の孤島に漂着したミラノの大公プロスペローは、魔法をもって島の主となり、かつてこの島の主だった魔女シコラクスの息子キャリバンを奴隷として召使っている。キャリバンは野蛮で醜いが、母親から教えられて島の荒地や肥沃地、清水の涌き出る場所などを知っている自然児でもある。

シェイクスピア以前のヨーロッパの妖精は、可愛いとか美しいと言うより、醜い、意地悪な、おどろおどろしいものであったと言う。そんな系譜を引いているのがキャリバンで、奇怪な魅力の持主。この新入りがどんな活躍をしてくれるか、まずは名前をつけてみる。生命の源は水。地球は水の惑星、計り知れない水の循環、雨・水たまり・小川・大河・海・嵐――水に住む妖怪の類と言えば―― 猩々・海坊主・河童……河童の出生をたどってみると、中国の娃々魚(ワウワウユウ)にたどりついた、山椒魚のことである。魚とはいえ短い手足と長い尾を持つ両棲類、生命力旺盛で何でも食べる長寿もの、時に赤ん坊の泣き声に似た声を出すと言われている。今回は別名の畑泥鰌(はたけどじょう)を名乗らせ、赤ん坊の泣き声を効果的に使おう。シェイクスピアも言っている「人は皆、泣きながらこの世に生まれて来たのだ」(リア王) 新しい生命誕生の祝福をテーマとするこの戯曲にはぴったりだ。

1幕

《全編劇中劇》

幕あきは踊りで始まった。ナニハヤのミコトの婚礼を広場で喜ぶ人々だ。男も女もきまたにドンゴロスの貫頭衣、頭に布を巻いた裸足の庶民たち。掛声を発し、車座になって仲間の踊りに声援を送るやら、連れ立って踊るやら、やんや、やんや、ドンゴロスの埃の舞いとぶプロローグ。これから始まる芝居の露払いであり、土俵固めである。

舞台中央奥に古木の切り株。前面のカットクロスを張ったパネル・三段重ねのアーチは、木の枝の絡み合ったデザインで森を表わすプロセニアム。踊る人々が掃けると、近つ飛鳥の殿様ナニハヤのミコトとその妃カケウマのヒメが、手を取り合って仲睦まじく登場。宴係が上手奥にひかえる。ミコトたちは婚礼の儀式を終えたばかり、新床までの時間をもてあましている。古代の妻問い婚においては、求婚の第一夜は拒むのが女性の作法であった。ここでも、掟によって深夜の鳴弦で浄めてからでないと新床は祝福されない。心急ぐミコトに宴係は、国の民の予興の準備が出来ていることを告げ、見物席に案内する。舞台上手袖の張り出しに造られた桟敷、ミコトとヒメは着座し御簾(みす)が降ろされる。「始まり、始まり」の声と共に宴係はからからと銅鐸(どうたく)を打ち鳴らす。原作と違ってここからすぐに劇中劇になる。さっそく、波々命(ナミナミのミコト)と小馬(コマ)小馬(コマ)姫の登場、国の民が素人芝居として演じているナニハヤのミコトとカケウマのヒメのそっくりさんだ。これから登場する若者たちも職人たちも妖精たちもすべて劇中の人物となる。従って職人たちの劇中劇「ピラマスとシスビー」は劇中劇の中の劇中劇「イワナヒコとアマゴヒメ」となる。

全体が素人芝居という設定だから、衣裳も彼らの手造りの素朴でシンプルなものとする。

原始布と呼ばれる、木の皮や草で織られた素材を使いたかったが、現在では全く特殊で、かえって高価につくので、主に麻布を使うことにする。麻布はイメージによく合ってくれるが、近頃では需要が少ないのか、素朴な味合いのものほど厚みや色の種類が少ない。職人、若者、妖精とグループ毎に材質感を変える。舞台上の時代でミコトとヒメは飛鳥時代だが、劇中劇は少し遡って古墳時代と設定。この頃はまだ和風が定着せず、朝鮮半島や中国大陸の影響が強く、ズボンなり筒袖なりと現代服に近い。飛んだり跳ねたり動きの激しい舞台である、踊りもあれば取っ組合もあり曲芸もとび出すからには、この動きやすさはありがたい。考証にしても、庶民の資料はごく少ないので、これ幸いと想像力にまかせてもらう。ヒコたちのヘアスタイル・角髪(みずら)も、いかにも造りものの角髪を地毛につける。角髪は髪を左右に分け、耳のあたりで束ねた結髪方だから、落ちるはずがないのだが、もし落ちてもそこはそれ劇中劇のことゆえ――と何でもありの世界にしてしまった。芝居はもとより虚構の世界、大きな嘘をもっともらしく見せるものだが、芝居の中の芝居となると、もっと楽々と現実を飛び越えて別の世界に入り込める。

さあ、すでに芝居は始まっている。ナミナミのミコトに娘の行状を訴えるカギロヒのムラジ。ミカルと恋人イカズチは叔母のいる山城の国への駈落を決心し、森で会う約束をする。アヒラはミカルの許婚者ヒムカに事を知らせて、自分が片想いするヒムカの後を追う、という若者たちの筋書はあまり変えないことにした。脚色するにしても翻案するにしても、大きく変える部分と変えたくない部分がある。若者 4 人の行動・セリフはほとんど原作に従い、セリフを短くするくらいに止どめた。

《修羅と埴輪》

原作の職人は6人だが、役者の多いのは我らの強み、ダブルキャストで身体のあく人に交替で6人以外の職人として出てもらう。名前は付いていなくても仕事はたっぷりとある。「飛鳥(とぶとり)の明日香男(あすかおとこ)が　しぎ罠はる　わが待つや　しぎはさやらず　はしきやし　女(おみな)さやる」職人たちのテーマソングを作った。「ああしやこしや　ええしやこしや」の掛声も勇ましく、多勢の職人たちによって大きな修羅が引き出されてくる。“修羅(しゅら)”は二股の木を利用した古代の荷物運搬用の橇。美術生がデザインして造られたものは、近つ飛鳥博物館に展示されていた本物と同じくらいの大きさで、実物かと思える程に出来上っている。自分たちの芝居をするための森の舞

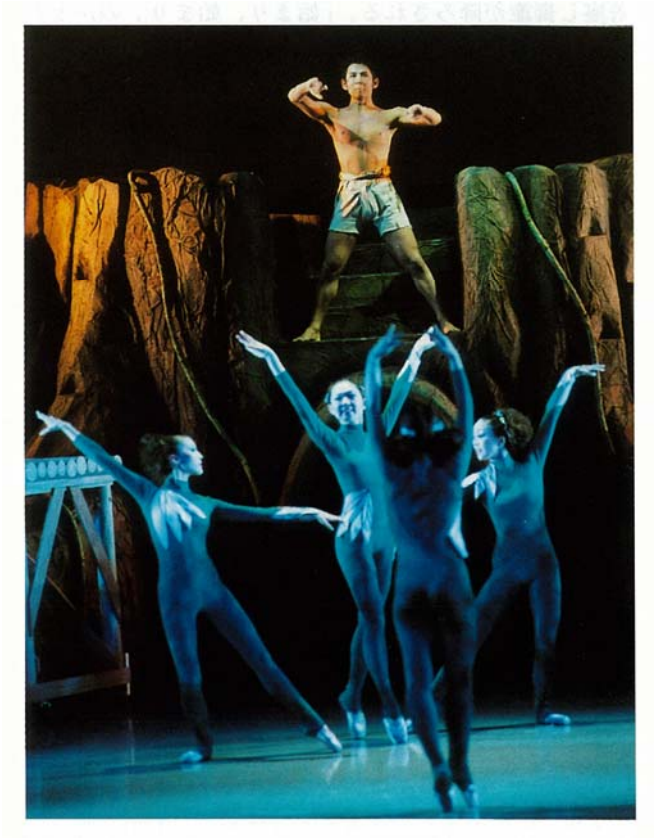
台を自分たちで造るシーン。舞台造りに必要な材量が修羅に乗せられ、埴輪も乗せられてくる。試作を見せられた時は、あまりにも即物的だと二の足を踏んでいた人物埴輪だが、舞台の両袖に立ててみると、確かに即古墳時代のイメージが重なる。

中央にでんと座った巨大な古木は、切り株の形をしていて、上に乗ったり攀上ったり、さらに根っこの真中あたりと中段の左右が洞になっていて、出入りも通り抜けも可能なすぐれ物。その前面に自分たちの芝居用仮設舞台を造るのがまずは職人の仕事。仕事の最中に棟梁が配役を読みあげる「さ、みんな手はやすめずによーく聞くんだぞ」。原作のピーター・クインスも大工だが、我がクインスは大工の棟梁。建物を造る材木は、南側には南側で育った木を、北側には北側で育った木をあてるのが良いと言う。適材を適所に配分する目利は大工の棟梁の役目であり力量だ。近つ飛鳥の棟梁も適材適所の配役でリーダーシップを発揮。

若者たちは変えないけれど、職人グループは、結婚を祝福し子孫繁栄を願うというテーマをしっかり押えていれば、様々なバリエーションが楽しめる。「ピラマスとシスビー」は、渓流の魚・岩魚（いわな）と雨子（あまご）の恋「イワナヒコとアマゴヒメ」となった。赤鼻ボトムは二枚目のイワナヒコ役なのだが、敵役もやりたい、女役も、いじめ役もやりたい出たがり屋。恋人アマゴヒメ役は、すでに子供を7人も生んでいる眉根。原作で恋人たちの自殺の仕掛人になるライオンは、脱皮を繰返し、死と再生の力に満ちた双頭（ふたつがしら）の大蛇（おろち）に変って、手白と脛黒が演じる。早竹は口上役となる。「あとの者はみんなで水草の壁をやる」恋は邪魔者があってより燃えさかる、石垣ならぬ水草の壁が2人の仲を引き裂くいじめ役。水草役はさっそく衣裳作りにとりかかる、包装用の紐をほぐした緑のリボンで身体を被うのだ。この作業は学校で稽古の早くから始められたが、早く作りすぎて、使っているうちによれよれになり、水草というより干草になってしまった。さて、天井から薬玉（くすだま）も釣下げられ、森造りは終った。次のシーンに必要な物を置き、不要な物を修羅に積んで職人たちは賑やかに引上げる。

《雨乞いは太鼓で踊る》

照明がぐっと暗くなり、力強い和太鼓の音、“鼓童”の音楽にのって舞踊生の踊りが始まる。深緑のタイツに白いシンプルな上衣、西洋舞踊でありながら大和風を感じさせる苦心の振付け。複数の踊り手の真中に 1 人の男の子登場、きまたを着けただけの半裸体が若々しく美しい「遊んじゃおうかー遊んじゃおうぜー」と歌う。次々と繰出される新手の踊り手、白い上衣を取ると全身タイツで清々しい。男の子は踊り手の間を縦横に動きまわり、古木に登り、歌は



「雨よ降れー風よ吹けー」と変り、雨乞いの踊りである事を示してくれる。太鼓に合せて撥（ばち）が持ち出され、打叩き、放り上げ、大地を打って祈り、雨を願う。約 14 分間の激しい踊りの後に踊り手が去り、静まった舞台に直径一尺ぐらいの木の枝をからめたような不細工な玉が転がり出てくる。その後からのこのこと得体の知れないもの、大きな藁人形か？大きな頭に小さな目、手足は短く尻尾がある、ハタケドジョウだ。藁細工風だが、実際はウレタンの細切で造られている着ぐるみ。

『テンペスト』のキャリバンは醜い怪物に描かれているが、美術生のデザインした藁のハタケドジョウは奇怪ではあるが愛嬌があって、赤いでんちが可愛い。大きな被物で声が聞こえないので、別にせりふ係が付く。舞台下手前の小さな切株に陣取って、姿と声で１つの役を演じる。ダブルキャストなので、姿と声は交代になり、前日着ぐるみを着た人は翌日せりふ係という段取り。全身を被う着ぐるみは、普通の肉体表現と違うむつかしさがある。動きにくく、視野は狭く、暑苦しくて汗くさい、観客に顔を見てもらえないのも役者にとって辛いところだ。しかし、動きを見ているうちに、中に入っている人の心持というか人柄が滲み出てくるように感じられ、驚いた。

ハタケドジョウが母親から教わった雨乞いのお呪（まじない）をしているところへ、サルトリイバラのミツバミドリゴが登場。三葉とは３人で１人のパックという意味で、演技生とミュージカル生の混成で演じる。A班は３人共女性で背格好も似ている、同じ動き・仕種を多く使ってみる。相性も良かったのか、稽古の始めから仲良く３人がくっつき合って、寄るとさわるとせりふと動きを合わしている。稽古を重ねた甲斐は必ずあるものだ、これだけ美事に揃ったパックは初めて見た。B班は１人が男性で２人が女性、体格も違う。各々に違う形で動きながら共通性を持つように表現する、身体の大きい男性が小柄な女性を背負ったり引っ担いだり、不揃いならではの動きの面白さがあった。

《愛の呪（まじな）いここかしこ》

雨が降らないのは、お天気を調整するのが役目の森の王・タカミクロマツのムスヒと女王・アズサオボロフジのククが夫婦喧嘩をしているから。原因は原作と同じく、エキゾチックな異国の子供の取合い。水不足は誰にとっても心配だ。サルトリもハタケドジョウを手伝うことになり、芋茎（ずいき）を振りまわして雨乞いの歌「…雨よ降れ　ふりふりて　落ちたぎつ滝となれ…」と祈っているところへムスヒとクク、青い目の子供を連れて登場。子供の手前、２人は仲睦まじく甘い言葉を交し合っているが、子供が遊びに行ってしまうと、子供をくれ！お断り！「もうー！」「もうもうと涎（よだれ）垂らしてみっともない、牛！」言争いから叩合いになり、いつもムスヒが負ける。子供が蛙を玩具に帰ってきて「かわいい？」２人揃って仲良く「かわいいーはしきやしー」。

ムスヒは子供をもらえない悔しさに策略を思いつき、サルトリに薬草を摘んで来させる。その花の汁を眠っている者の瞼に垂しておくと、目覚めて最初に見た者に恋焦がれるという原作どおり。ただし“浮気草”と呼ばれる恋の三色菫ではなく、三千里離れた大海原に浮かぶ、まっくら島の洞窟の奥にムスヒが密かに育てているほたるぶくろ。この花の汁をククに使って惑わせる魂胆。

花たちに囲まれて、ククと青い目の子供の眠る花の褥が押し出される。妖精たちのララバイのシーン。10 人の花たちの子守唄と踊り「わだつみの潮うずまき　蜃気楼かぎろひぬればー」花たちの衣裳は白いパンタロンに丈の短いボレロのへそ出しルック、頭に付けた翼飾りが目立つ。妖精グループの人は皆この翼飾りを付ける。百円ショップで見つけた薄くて軽くて丈夫な、自動車の日除けを土台にして造られた妖精のシンボル。ムスヒとククの頭飾りは特に大きく光背のように見える。激しい動きの中で毀れたり外れるかと思ったが、奇跡的に無事だった。眠っているククの目に、ムスヒは花の汁を垂らす。

ミカルを追って森に迷い込んだヒムカに縋るアヒラ、もう愛していないと突放されてもなお追縋る。アヒラ役の１人はかなり体格の大きい女性で、打たれ強そうだ。ヒムカに蹴られ踏みつけられるがむくむくと起上ってまた追ってゆく。かわいそうなのにどこかユーモラスで明るい。この学生には、原作で「塗りたての旗竿め」と言われる悪口の場面で、「中味

は空っぽの吊鐘め」とセリフを変える。原作者も座付き作者として、その時々の役者に合せて書変えていたのだから。

アヒラに同情したムスヒは、ヒムカにも花の汁を使ってやれとサルトリに命じる「男はすぐ分る、宮人(みやびと)の装束と角髪が目印だ」しかし、サルトリが花の汁を垂らしたのは、駈落して森をさ迷い、眠り込んでいたイカズチだった。そこへ通りかかるヒムカ。「あれ、角髪の男がもうひとり…王様には内緒、ないしょ…」とサルトリ。と、ヒムカを追うアヒラ登場。目覚めたイカズチはあっさりとアヒラに一目惚れ。突然の求愛にアヒラはからかわれていると怒って去る。追うイカズチ。置いてきぼりのミカルは暗闇の中に目覚め、訳も分らずイカズチを求めて闇の中へ――。

《ハタケドジョウ兄弟となる》

若者たちが立去った場所、ククの花の褥の近くへ、職人集団がやってきた。芝居の稽古が始まるのだ。棟梁が桟敷席のミコトとヒメに一礼。口上役が筋書きを説明し、役者たちはパントマイム、サルトリが窺っているとは露知らず物語は盛上ってゆく。イワナヒコとアマゴヒメの逢瀬を隔てる水草の壁、緑の紐に被われし水草の面々は、三々五々と群をなして揺れながら通せんぼ。アマゴヒメに扮する眉根は、くすぐったがりで笑い上戸、水草たちに絡まれてついげらげらと笑ってしまう。竹の先を細く割った篎(ささら)を采配にして指揮をとっている棟梁は気が気ではない。「ここまでおいでいいものあげるここまでおいで遊んであげるー」と水草たちに翻弄される恋人たちは、月見草の丘で逢引きの約束をする。赤鼻はいったん退場、この間に変身の衣替え。水草たちは踊りながら緑の紐を脱ぎすて、掌に隠し持った花弁を開いて月見草の群落になる。その中に潜むのはライオンならぬ双頭の大蛇。この大蛇は、百獣の王ライオンと同じく力強く、おどろおどろしくあってほしい反面、眉根に笑われるようなところもほしい。大蛇に出くわした眉根は一瞬ぎょっとするが、自分たちで造った素朴な大蛇に、思わずげらげら。篎で叩いて叱る棟梁「怖い場面なんだから」。眉根はようやく、恐ろしげに笠を投げつけ逃げまどう「助けて！イワナヒコ」。呼ばれたイワナヒコ登場し、全員ぎゃぁー！サルトリのいたづらによって赤鼻は、驢馬(ろば)ならぬハタケドジョウに変身させられている。キャリバンのハタケドジョウと同じく、藁細工風の全身着ぐるみに青いでんち。これより赤鼻のせりふは下手切株の赤鼻のせりふ係がしゃべる。驚いて逃げ去った職人たち。ひとりぼっちになった赤鼻は強がって“黒つぐみの歌”を歌い「うしろに居るのだぁれ？」と振り向いたとたんにキャリバンのハタケドジョウにばったりと出合う。すっかり意気投合し、兄弟と呼び合う仲になり黒つぐみの歌をデュエットしていると「ほわー！」と喜びの声。ククが目を覚したのだ。愛する人を一度に 2 匹も見つけて大喜び。ククを取巻く花たちの挨拶と踊り、2 匹のハタケドジョウは、明日香の水の涌所、愛の褥へと誘われる。

――幕――

《幕間》

学生諸君は古典と聞いただけで頭が痛くなるそうだが、1 つづつの単語が分ると結構面白い。ただ、解釈がいくつもあったり、解説文に、意味不明・語義未詳と書かれていると困ってしまう。道具や衣裳の考証にしても、飛鳥以前は特に分りにくい。だからこそ面白いとも言える。芝居とは夢物語、夢と言えるのは有難い、どんな状況も夢でくくれば可能である。

今回の翻案にあたって、せりふの基本は現代語だが、なるべく柔かな言廻しを心掛けた。調子の良いせりふをと思い七五調にした部分がある。これが意外と学生諸君に馴染がなかった。現代っ子にはすでに異文化に等しい

のか。かつて「三人吉三」のせりふを憶えて、結構調子良く口づさんだものだが、日本的リズムと思っていた七五調がこれ程に廃(すた)れているとは驚いた。歌詞にはかなり古語を借りてきた。音楽に乗せてしまうと、素直に雅びな雰囲気が時代を伝えてくれるかと期待して。ともあれ“久遠にして不詳”は大いに想像力を掻立ててくれる。

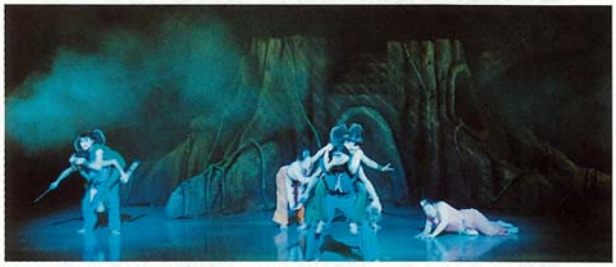
2 幕

《手造りの大嵐》

森の夜、怪しげな鳥の声、不気味な獣の唸り。照明の木本教授の知恵をお借りして、ダーク・オープンとなる。古木が舞台奥からずっずっずっと人力で前面に出てくる。古木のズームアップだ。上にはムスヒがすっくと立っている。サルトリは報告する。ククがハタケドジョウに夢中になっていること、角髪の男に惚薬の花の汁を塗ったこと、しかし「角髪の男は2人いて…」言いも終らぬうちに本人のヒムカと、イカズチを探すミカル登場。イカズチを殺したのではとヒムカを問詰め去ってゆくミカル。疲れて眠り込んだヒムカにムスヒは自ら惚薬を塗ってやる。そこへアヒラ登場、イカズチが泣きながら求愛しつつ追ってくる。ヒムカは目覚めてアヒラを見る。さあ今度はアヒラを求めて 2 人の男が恋の鞘当てだ。ミカルが戻ってきた。アヒラはミカルがけしかけたと思い、ミカルはアヒラを恋盗人と罵り、ついに女同志掴み合いの喧嘩にまで発展してゆく。ムスヒとサルトリはこの騒ぎを、古木に寄添って見物、時には手伝ってやる。女同志は近づけぬように、男同志はぶつかり合うようにと大忙がし。

思いっ切りの取っ組合い罵り合いは、人間の内の暴力性を解放する。笑いと似て、発散する喧嘩はエネルギーに満ちている。体当りあり、飛蹴りあり、転げ廻り、駆けずり這いずり、あざだらけになりながら求めるものを追いかける。欲しいものを手に入れるのは楽じゃない。罵りの言葉を全部口から吐出して心を浄め、その穢い言葉から力をもらう。

男たちはついに剣を抜いた。命の遣取になってしまっては悲劇だ。ムスヒはサルトリに命じる。黒い霧で隠して、いきり立つ男2人を引離し、蓮の花咲く泥沼に若者たちを番(つがい)になる形に寝かせ、薬草を目に塗ってやるように。後は沼の精たちが泥の禊で浄めてくれる。「遊んじゃお　遊んじゃおうぜ」サルトリは大喜び。黒い霧の闇が押寄せ、右往左往するイカズチとヒムカ、各々の背にサルトリが乗っかり、あとの1人がイカズチの声やヒムカの声で相手を誘う。あちらこちらと自由自在、恋の奴を引ずり廻す。調子にのったサルトリは



「…風よ吹け雲を呼べ…」と雨乞いの歌を歌ってしまったからさあ大変、雨・風・雷の大嵐がやってきた。

音響効果と照明のパフォーマンス。現在では擬音も機械仕掛になっているが、以前は舞台袖に道具を置き、音を出していたものだ。小豆を入れた行李を傾けたり、貝をこすり合わしたりと。今回はこの素朴な道具を舞台に引ずり出して、音効生に実演してもらう。鋼の板が鳴響き、手廻しの風が唸り、稲光が走り一瞬人々を照らす。雨だ、風だ、雷だ、サルトリも沼の河童も大喜び。この時すでに舞台には、蓮の花咲く泥沼のマットが出ていて、河童たちが泥投げに興じている。アヒラとミカルは泥を投付けられ、滑って転んで泥だらけ「いやだ、もういや帰りたい」とさっきの喧嘩の勢はどこへやら。イカズチとヒムカはようやく巡り合い「そこ動くな」「行くぞ」と剣を交じえた瞬間、その剣に落雷！ストップモーション！打ち合せたままの剣がブラックライトで奇しく光る。女たちは固まってしまった男たちに走り寄り抱付く、ミカルはイカズチに、アヒラはヒムカに。またまた雷鳴、稲光、4 人共に泥沼のマットに倒れ臥す。

雷に怯えて泣いている青い目の子供を連れてムスヒが登場「雷さん雷さん飛んで行けー」嵐は去り子供は泣止む。サルトリのへまの連続に、ムスヒは自ら若者たち4人の目に花の汁を塗ってやり、間違いのないように番(つがい)同志の頭をごつんごつんと合せ、その場で目を覚させてやる。さすが王様。稽古

の間、若者たちの額に可愛いこぶがよく出来た。子供も手に入ったことだ、今度はククの目の呪いを解いてやろう。

《愛の褥は水の中》

大騒ぎの嵐の後は滝の場面だ。長閑な明日香の水の涌き所への転換をどのように見せるか？これも座付き作者の楽しみ。ここは見物席に座りっぱなしのミコトとヒメに手伝ってもらうことにしよう。桟敷は緞帳の外（客席の前面上手になる）なので、彼らは幕間の休憩にも動けない。御簾が降りていて客席から一応は見えないが、さぞ窮屈なことだろう。桟敷の下には美術生の黒子が１人常時待機している、これも辛棒のいる仕事。ミコトとヒメにも幕間の休憩をと、急遽、現代のロビーの場をつくる。黒の引割幕は使わず、舞台に葦簀（よしず）を出す、葦簀前が即ちロビーでミコトとヒメが手足を伸ばして寛ぐ。宴係が酒を勧める。歌い踊って醸されたあらたかな御酒を酌交しながら２人は、イワナヒコとアマゴヒメはどうなるのだろうか―大蛇はどこへ行ったのか―ハタケドジョウとククは？とロビー談義が盛上る。その間に泥沼のマットは掃けて、滝がセットされている。ミコトたちが桟敷へ戻り葦簀が払われると、手回しで水の流れを表わす滝、その中段には仲良くまどろんでいるククと２匹のハタケドジョウの姿があった。ムスヒはククの目に呪いを解くつわの汁を垂らして目覚めさせ、２人は仲直り。睦まじく「もぅー」と言合って花の臥所へ。と「あれー！」けたたましい悲鳴と共にアマゴヒメが走り出てくる、後からは双頭の大蛇「助けて！イワナヒコ！おろ　おろ　おろち！」。滝の上でハッと気がつくイワナヒコ、ハタケドジョウにされている赤鼻だ。滝から飛降り大蛇の後を追う、本物のハタケドジョウも後を追う。

頭の上に頭をつけた双頭の大蛇は、身体の前に相撲の化粧回しのような前掛を付けている。蛇体の前半分は空洞の蛇腹になっていて透けて見えるが後半分は黒い布の長い長い尻尾。ついに追付かれたアマゴヒメ、笠を取って投付けるが及ばず大蛇に呑まれてしまう。つまり大蛇役の学生が前掛を持上げ、その中にアマゴヒメが自分から入って行く。透けた布張の蛇腹を通り黒布の尻尾の方へと這って行くのが見える。残された笠を口にくわえ見得を切る大蛇、笠をぷいと捨て、芝居の進行上立ったまま眠る。ようやく追いついたイワナヒコは、笠を見つけて嘆きのパントマイム。大蛇の中からは眉根の笑い声「やや、アマゴヒメの声が見える、吾（あ）こそイワナヒコなれば　汝（な）こそアマゴヒメ」と愛の名乗をあげ、ハタケドジョウの姿のまま大蛇の腹の中へ、これも自ら飛込んで行く。続いて本物のハタケドジョウも「兄弟だろう、オレも一緒に」と大蛇の腹、正確には前掛の下に潜込んで奥へ奥へと――。

《産霊（むすひ）》

芝居の成行に桟敷から身を乗出していたミコトとヒメ「あらまあ何という事でしょう、みんな呑まれてしまって、それにしても憎らしい」ヒメは大蛇を「これー！」と叱る。すかさず棟梁が進み出て、大蛇に呑込まれた恋人たちが、美しい若者として生まれ変る事をのべ、鮴で囃し立てながら大蛇からの誕生をうながす。が、長い尻尾が蠢くばかりで一向に現われない、生みの苦しみである。棟梁は鮴で地面を打って励ます「さっと見事に生まれ変る、素早く、さっと、速やかに…さてさてなかなか気の揉める…」職人たち、ムスヒ、ク、青い目、サルトリ、若者たち…全員ぞろぞろ登場して応援団となる「出てこい　出てこい　がんばって　がんばってー」ようやく赤鼻が真赤な衣裳の美しい若者となって、大蛇の尻尾先から飛出してくる「お出ましーひとりー」さあもう一人だ、がんばって！「お出ましーふたぁりー」眉根が美しい乙女となって真赤な衣裳で飛出す。ああらめでたやな、めでたやな。全員やんや、やんや、「明日香河満ちあふれつつ…」と寿（ことほ）ぎの歌を歌い、足踏み鳴らしての踊りとなる。

この再生のテーマは、原作の劇中劇「ピラマスとシスビー」では、若い恋人たちの自害によって表わされている。「ピラマスは本当は死ぬんじゃない」と断って、仮死である事を明らかにし、芝居として演じ、元気に起上る。今回は蛇という脱皮するものの腹を借りて、若い恋人本人たちが腹の中で衣替（ころもがえ）をして生まれ変る。その新しい誕生には多勢の人々や妖精の応援があった。

ついに子孫繁栄は祝福された。待ちに待たれた弓人登場。走りの得意な体格の優れた美術生が大弓を小脇に抱え、スローモーションの形で走り出てくる。もう 1 人の美術生が、仏像の足元の天邪鬼のような形に蹲って岩になる。岩に片足をかけた弓人、ブールデル作の彫刻「弓を引くヘラクレス」のポーズ。ヘラクレスという人物はギリシャ神話の英雄で、多くの手柄によって不死を手に入れたとか。必然と偶然の関係は摩訶不思議だ。必然を追掛けまわしていると、それは偶然のような形で見つかる。弓人は力強く弦を鳴らす、1 度 2 度 3 度。魔を払い、見得ざる敵の退散に威力を発揮する鳴弦（めいげん）・弦打（つるう）ち。音効生苦心の弦音は、矢の唸りとなって舞台下手から客席を縦断し、上手客席の後方へと見事に渡って行った。真夜中を知らせる音だ。「いざ新床へ」ミコトはヒメを導き、苦労の後にようやく倖せを掴んだ 4 人の若者もカップルとなって「いざ　いざ」と新床へ退場。

舞台の中央には大蛇の抜殻が残されているだけ。と、そのあたりからおぎゃぁおぎゃぁと赤ん坊の泣き声。そうだ、ハタケドジョウがまだ腹の中。2 人のせりふ係があわてて助け出しにゆく。元気付けに“黒つぐみの歌”を歌いながら大蛇の尻尾から出そうとする、なかなか出てこない。初日は、尻尾の長い布が絡み付いて本当に手間どってしまい、せりふ係のあせりに客席から応援の手拍子が来た。楽日は役者たちが粘りすぎて、手拍子は来たが間があきすぎた。“間”というものはむつかしい、客は役者の掛引を感じとっている。この辺が学芸会と言われるところ。

ようやく抜出したハタケドジョウ、舞台前面に出、黒の引割幕前に正座、被物を取り、初めて観客に顔を見せる。長時間着ぐるみの中で汗にまみれ、酸欠にあえぎ、上気した顔は風呂上りのように湯気が立ってみずみずしい。居住いを正し、息を整えて止めぜりふ。

「飛ぶ鳥の　近つ飛鳥に寄り集う　夢の住人我ら一同おめず臆せず　飛んだり跳ねたり　いづれの花もつぼみゆえ　お気に召さずともご免そうらえ。とりとめなしの物語　うたた寝の夢まぼろしとおぼし召せ。さいわいおとがめなきならば　ますます精出し見事な舞台　お目にかけるとお約束。それではみなさま方との　出合いの縁（えにし）　逢う瀬の喜び　別れのつらさ　お名残おしんでもうひと踊り――　まいります　いざ！」

いざ！を合図にお馴染み楽しいフィナーレ。止めぜりふを誰が言うかは決めていなかった。原作では有名なパックのせりふだが、稽古を続けている間に固まってきた配役である。座付き作者の楽しみを大いに味合った。

お疲れさんでした――。

――幕――